

『ソ連人になった日本人の物語 霧のヴェールの彼方』

菊地浩著 2014年刊ドニエプル出版 ¥1,000 (税別)

連絡船で津軽海峡を渡り北海道の土を踏み、密かに根室から小舟に乗って海へ向かったのは、1953年7月26日、「はじめか終わりか」のゼロ地点に自分を置いてしまった。ソ連の国境警備隊に拿捕されたのは8月2日。ところは千島。やがて「スパイ」容疑はなかなか晴れず、越境は“終わり”ではなく人生のはじまりとなった。著者は、「如何にしてソ連に行く決心をしたのだ」と問われてると返答ができない」と記しているが、それは本紙の半分を割いている戦争の渦巻く世界の歴史に、奥深く秘められているようだ。

著者は1927年10月4日に東京で生まれた。母や父に連れられて遊んだ甘美な幼年時代の思い出も、1931年満洲事変の勃発を機に、変貌する。1945年1月に厚木の第2相模原海軍航空隊に予備練習生として入隊する。同年8月に終戦。家に帰ったのは同月26日、病弱の母親が迎えてくれた。その後77日間を、自称“悪童”でもあった著者は母と二人で暮らし、最後を見送った。それからの8年間は周りの人に助けられながらも放浪の生活だった。

その日、海上の霧笛に背中を押されるようにして小舟で7日間漂流し、拿捕される。疲れ切った体は病院に移され、そして民警署に移されたとき、着ていたものはきれいに洗濯されていた。やがてユジノ・サハリンスクへ運ばれ、独房生活に入る。ソ連の法律ではあらゆる形の暴力行為を厳禁されていて、著者が反ソ宣伝できかされていた「冷酷無残」さはなく、ソ連軍人達の囚人に対する人間味に驚いたという。それは囚人仲間同

士、あるいは係りのおばさんたちも同じだった。ある時、スパイを装ってみるがばれてしまう。

ある朝、黒パン塩漬けにしんお茶の朝食がすむと訊問に呼び出された。調査が終わったことを告げられる。サハリンから客船「ヤクーチャ」に乗り、ウラジオストクを経てイルクーツクのラーゲリに着いた。1954年4月頃である。その裁縫工場で働くことになった。ここで若い画家と知り合いになり油絵を教わったりする。「釈放請願書」をモスクワに出したらどうか、と勧められ元裁判官だった老人が書いてくれたのだ。七月の終わり頃クラスノヤルスク地方のラーゲリに移される。カンスクという町に6人の日本人が住んでいることを耳にし、その中の一人と文通をした。

ちょうどその頃、モスクワから釈放通知を受け取ったのだ。囚人の仲間たちに見送られアンガルスクに辿りつくが、イルクーツクへ舞い戻る。行き場のない著者はラーゲリへと助けを求める。そこで紹介された運送人夫としてソ連社会での第一歩を踏み出したのだ。その後カンスクでの日本人たちとの生活も、突如かれらの帰国の決定によりここを後にする。妻子をおいて帰国する人から家族を引き取ってくれとしがみつかれ、置手紙をおいてまともや「監獄への放浪」へと向かう。行き先はモスクワだった。

第二の人生の旅がはじまるのだった。著者はそれを「胎動」と名付けている。1956年末、新しい人生を始めることを心に誓って出所した。オデッサに向かって旅立ったのだ。そこでソ連国籍を取得し、結婚し、娘にも恵まれた。1975年に22年振りに一時帰国、20年勤続工場ベテラン称号を受賞等々満たされた人生を送った。1988年オデッサにて逝去し、娘さんのカチューシャも1991年に訪日している。 (波)